

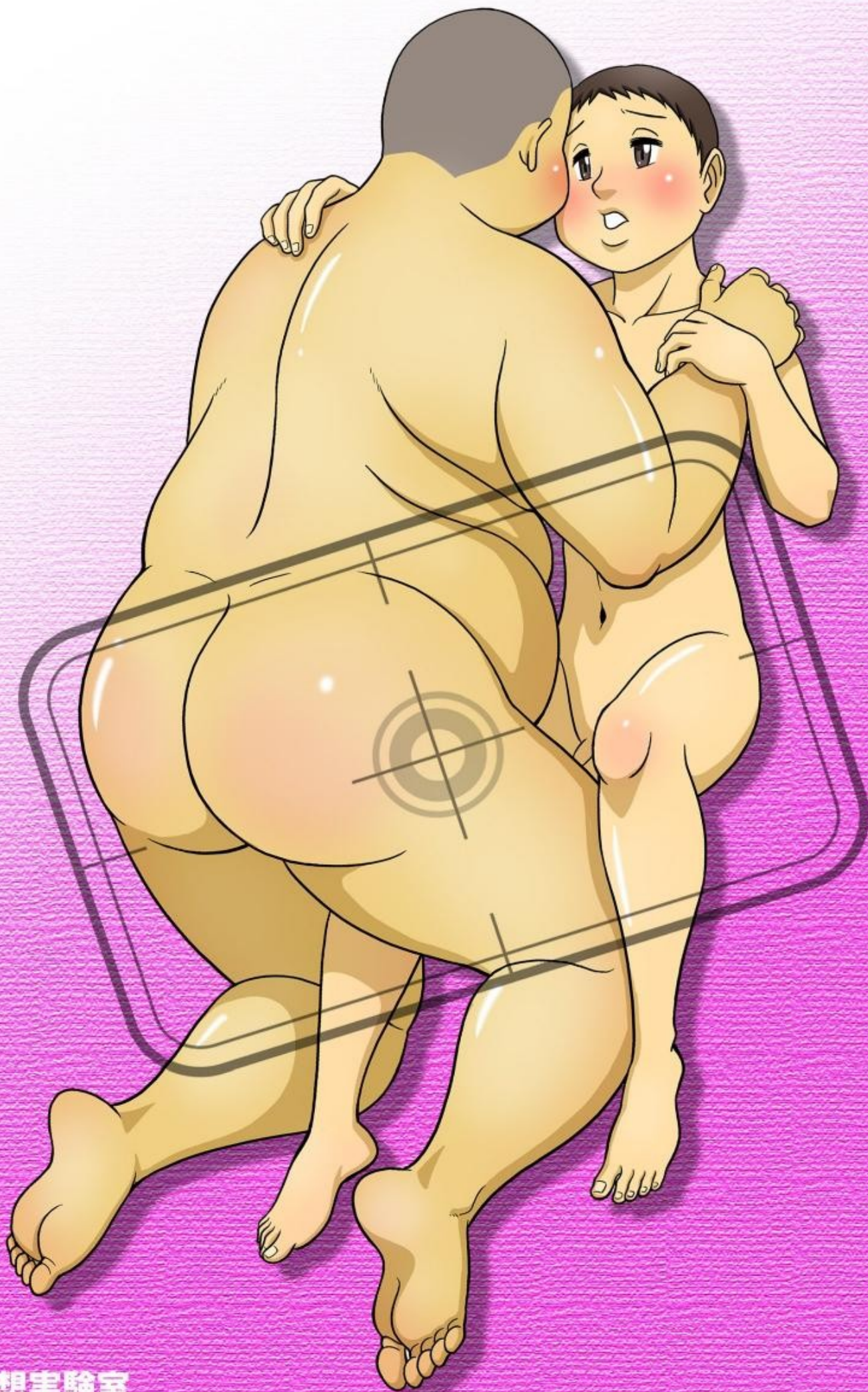
SHAN FAN COMIC

GOHAN
COMIC

18
ADULT
ONLY



秘密の兄弟・弟編



ああ…
どうしよう

僕…またやつちやった

もう3年生になるのに
なんでいつまでたっても
治らないんだろう

僕やっぱり何処か
おかしいのかなあ…?

くっしょい…



ん…

ドキ!!



「やつばやつちゃったか…
なんか匂いするなあと思ったら…」

「…ごめんなさい…」



「謝らなくていいから…
ほらさっさとそれ脱ぎな」

「うん…」

僕とお兄ちゃんは
一緒の部屋で
布団を並べて寝ています

もうちよつと前は
同じ布団で
一緒に寝てたんだけど
いつからか別々に
寝るようになった

…そりゃそうだよな

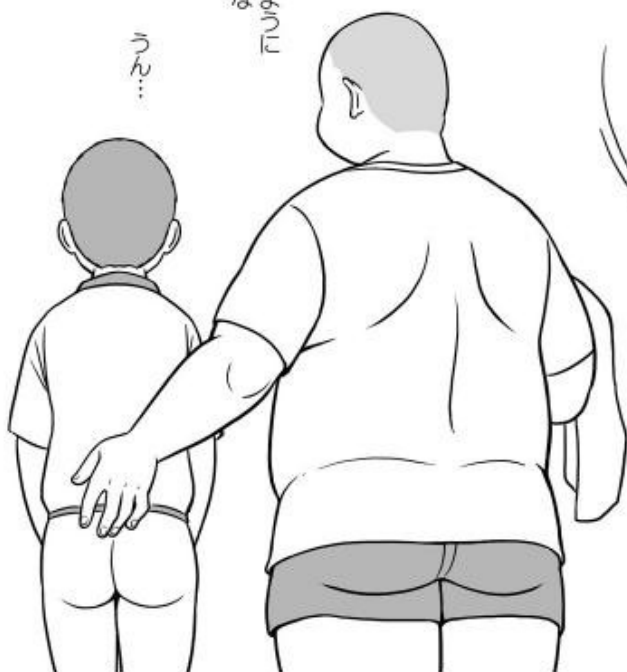
オネシヨするような
弟となんか一緒に
寝たくないよね…

もそ…
もそ…



お母さんを
起こさないように
そお…とな

うん…



お兄ちゃん

僕と4つ違いのお兄ちゃん

お母さんが
外に働きに出ている間
代りに家事をこなしている
働き者のお兄ちゃん

ジャブ
ジャブ

中学生になって
体が大きくなってからは

ぶつきらぼうで

あまり笑わなくなつて

僕とあんまり

遊んでくれなくなつたけど

今でも変わらずに

僕の面倒を見てくれる

お兄ちゃん…



でも…どうしよう

恥ずかしくて
お兄ちゃんの顔を
まともに見られない…

裸を見られるのなんて
恥ずかしいよ
だって兄弟だもん

もじ…

もじ…



でも三年生にもなつて
オネシヨする弟つて
お兄ちゃんにどう
思われてるんだろうと思つたら
どうしても…

夜にあんまり
うるさくすると
隣の部屋で寝てる
お母さんまで
起こしちゃうから

ヌル…
ヌル…

ムニョ…
ムニョ…



だからこんな時間には
お風呂に入る時は
シャワーなんか使わない
桶に少しだけお湯を入れて…

スポンジを使わないで
手で石鹸を泡立てて…

お兄ちゃんはお
汚れた僕のオチンチンを
いつもゆっくりゆっくり
丁寧に洗ってくれる
まるで生まれたての
赤ちゃんの肌を
洗ってるみたいだ…

んっ…
んっ…

ブルブル…



…うん

それは
いいんだけど…

洗って

もらつていて

こんなコト

言うのも

変な話だけど…

いいよ お兄ちゃん
そんな熱心に洗わなくても

自分でだつて洗えるんだし
お湯でチャッチャと
洗い流すくらいで充分じゃない

そんな
貴重品でも扱うみたいに
丁寧に丁寧に洗わなかつたって…

ムニョ…
モニョ…



あつ…
くすぐりたいよ
そこはやめて…
ソコは洗わなくても
いいよ…
そんなトコまで
汚れてないよ…
多分…

あん…
あ…
あ…

入ってるよお…
入っちゃってるよお…
指…指…

そんなトコまで
熱心に洗われたら…
ああ…ああ…

毛にか
毛にか

くちゅ
くちゅ

…ほら
またこんななっちゃった…

何でか解らないけど

お兄ちゃんに洗つてもらう度に
僕のオチンチンは硬くなつて…
上を向いちゃって…

僕はいつも
変な気分になっちゃって…

そんな
恥ずかしがってる
僕を見て
お兄ちゃんはいつも
からかうように笑うんだ
「お前も一丁前の
男なんだな」…なんて
訳わかんない「ト言つてさ

なで"なで"

こっちは
面白くないよ

普段 無愛想なクセに
なんでこんな時ばかり
笑ってんだよ もお…

それから
新しいパンツと
パジャマに着替えて

押入れから新しい布団を
引っ張り出して
(濡れた布団は夜のうちに
外に干しておいて)

何もなかったみたい
に
また寝るんだけど

なんでだろう
もうオシッコなんか
出ないはずなのに

いつも
オチンチンが
ウズウズしちやつて…



目が覚めた時には
お兄ちゃん
先に起きて朝ごはんを
作ってくれてた

でも お互いに
一言もしゃべらないで
ただ黙々と食べた

何を話したらいいか
わからないから…



ああ僕は
一体いくつになるまで

こんな
気まずい気分の朝を
迎えるんだろ…?



…こんな風に
恥ずかしくも平穏な毎日を
過ごして来た僕らに

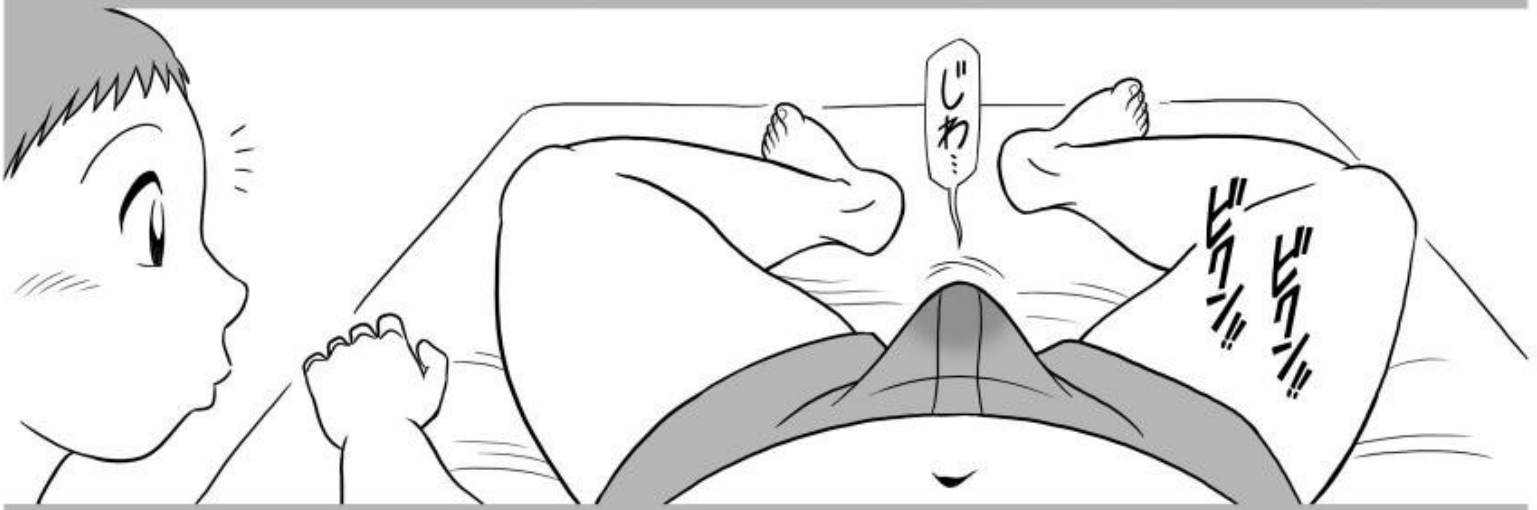
それは突然やつて来た



お兄ちゃんの様子が変わだ
息が荒くて
汗とかいっぱいかいてて
何だかとっても
苦しそう…

どうしよう

どこか具合悪いのかな
起こした方がいいのかな
お母さんと呼んだ方が
いいのかな
ええつと…ええつと…



何だろう
なんか変な匂いが
部屋の中に満ちてきた
青臭い葉っぱみたいな
ツンとする匂い…
なんだろうコレ？



「お前…誰にも言うなよ
誰にも言うんじゃねえぞ!!」

カアア…!!

「これは…違うんだ
お前のオネシヨなんかとは
全然違って…あの…」

「け・健康的な男子だったら
誰でも起こりうる
自然現象であって…その…」

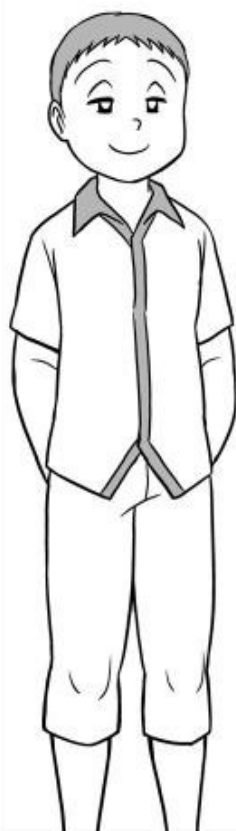
解ってるよ
解ってますよ

お兄ちゃんに
何が起ったのか
僕にはすぐ
解りましたとも

ニッコ
ニッコ



もぞ
もぞ



そっだよねえ
恥ずかしいよねえ

まさか中学生にもなつて
オネシヨしちゃうなんて
夢にも思わなかった
ろうしねえ

僕には痛いほど解るよ
今のお兄ちゃんの
苦しい気持ち

情けなくて悔しくて
泣き出したくて

不安で不安で
しょうがないんでしょう?

ジャ
ー
ッ

ジャ
ブ
ジャ
ブ
ジャ
ブ



大丈夫だよ
誰にも言わないから
言わないでいてあげるから

お兄ちゃんだって
僕のオネシヨの事
誰にも言わないもんね



そんなに
照れなくていいから
恥ずかしがる事ないから
お母さんにも
内緒にしといてあげるから

…ほら早く
パンツだけじゃなくて
体の方も洗わないと

お母さんに
見つかったちゃうよ？

安心して

今日は僕が
お兄ちゃんのを
洗ってあげるから

いつも
洗ってくれてるんだもん
やり方は解ってるから



うわあー すっこ…

お兄ちゃんの
オチンチン触るの
なんて初めてだよ

あれ？

でもお兄ちゃんのとて
昔からこんな
大きかったつけ…？

色も形もなんか
違ってるような…？



お兄ちゃんつてもう
毛が生えてるんだ
すつげえ…
大人みたいじゃん…

あ…

はあ

はあ

あ…

ああ…

はあ

はあ

なんだ
やつぱりお兄ちゃんだつて
硬くなっちゃうんじゃない

はあ

はあ

はあ

僕がオチンチン
硬くしちゃった時は
あんなにからかったりするクセにさ

…?

ブルル…

「…どっしたの
お兄ちゃん?
なんか苦しそう…」

「そりゃ
人にオチンチン
洗ってもらう事なんて
そう無いだろうけど」

「そんなに
息荒くなるほど
苦しいモンなの?」
「体もこんなに震えて…」

…

「どこか
具合でも悪いの?」

「…ああそうだよ」
「お兄ちゃんは病気なんだ…」

はあ

はあ

「そんな事はいけない事なのに…
毎日毎日エロい事ばかり
考えるようになって…」

「考えたくもないのに
妄想が止まらなくて…
一日中 変な気持ちになって…
夜もよく眠れなくて…」



「オレ一年前とかは
こんなんじゃないかったのに…
こんなエロい奴じゃ
なかった筈なのに…」

「じいに悪い物がいっぱい
溜まつてるからいけなんだ…
こいつを少しずつでも
絞り出していかないと…」

「お兄ちゃん…もう…もう…
どうにかなっちまいそつだよ…」

そうか… だっておかしいもんね

あんな 青臭い匂いの汁が
オチンチンから出てくるなんて
普通じゃ考えられないもんね

うわ…どうしよう
なんか怖くなってきた

お兄ちゃん
そんなに具合悪かったんだ

どうしよう… どうしよう…



「僕…どうしたらいいの…？
僕に何か出来る事ないの…？」

「お兄ちゃんを助けてくれるか……？
何にしても……許してくれるか……？」

お兄ちゃんは裸の僕を強く：強く抱き締めた

$$\dots \neq \top = \dots \neq \top = \dots$$

その意味はよく解らなかつたけど僕は「うん…」と返事した

だつて：
こんなお兄ちゃんをほつとけないもん……

...ト

...#T=

...トニ

僕がそう言うとお兄ちゃんはお前のパンツに手をかけてゆっくりと脱がしていった

↑↑↑

これから何が
はじまるんだろ…

$$\begin{array}{c} \vdots \\ \# \\ \vdots \end{array} \quad \begin{array}{c} \vdots \\ \# \\ \vdots \end{array}$$

お兄ちゃんが
何をするつもりなのか
僕には全然解らなかったけど
お兄ちゃんの熱い体温が
僕の肌に伝わってきて
それがとても気持ちよくて
この時の僕は
ちっとも怖くなかったんだ…

お兄ちゃんは
僕の体のあちこちを触りまくった

肌の感触と体温を
存分に味わうように
揉んで…吸って…舐めて…

僕の体を全部
味わい尽くすように…

チューもいっぱいした

ほっぺにチュッてやるんじゃないかって
舌を絡めて強く吸い合う
大人の人がやるようなチューだ

そしてお兄ちゃんの口は
僕の股間の方へ向かって…



ピンと硬くなったオチンチンを
お兄ちゃんは熱心に頬張って
舐め回した

ピチャピチャ音を立てて
舐めて…舐めて…舐め回して…

なんでそんな汚い所を舐めるのか
ちよつと不思議だったけど
意外と嫌な気持ちはしなかった



それどころか 気持ちいい…
なんでか解らないけど
ずつとこうしてて欲しいと思う程
すつとく気持ちいい…

なんか
溶けちゃいそう…

僕たちは
汗だくになって重なりあつた
熱く熱く お互いの体が溶け合つて
くっつきそうになるくらい…

お兄ちゃんは
僕のお尻の穴に指を入れて
グリグリと掻き回してきた

お兄ちゃん…痛い…
それは…ちよつと痛いよ…

ぐっちゅ
ぐっちゅ

ぬっほ
ぬっほ

「やっぱ」「は
まだ小さくて無理かあ…」
お兄ちゃん
ちよつとがっかりした
感じで呟いた

「今日はやめとくけど」
これからゆつくり時間かけて
ここを開発してやるからな」

くぁくほ

その意味は 解らなかったけど
耳元でそう囁かれて
僕はちよつと 背筋がゾクツとした

ぺろぺろ

ぺろぺろぺろ

いりり

ぺろぺろぺろ

いりり

そしてお兄ちゃんは
僕のお尻の穴を指で拡げて
お尻の内側に向かってぺろぺろと
音を立てて舐め回した

お兄ちゃん…!!
汚い!! 汚いよお そんなトコ…!!

んほ

は

くすくすた…いけど…けど…
ちよつとそれ気持ちいい…
オチンチン 舐められるのと
同じくらい気持ちいいかも…
ああ…!! ああ…!!

お兄ちゃんのオチンチンから
白くてドロツとした物が
ビュツビュツつてすごい勢いで
噴き出した

ピクツピクツて
体を痙攣させるお兄ちゃん

…これで大丈夫だよな？
これでお兄ちゃんの悪いトコが
少しは良くなるんだよな？

…でもねえ
これはお兄ちゃんには
恥ずかしくて言えないけど

僕もお兄ちゃんと同じように
オチンチンがビクビクツて
なっちゃったんだよ
(お兄ちゃんみたいな白い物は出なかったけど)

よく解らないけど
これってイケない事なのかなあ…



僕たちは 数年ぶりに
同じ布団で一緒に寝ました
「オネシヨ…しちゃうかも
しれないよ…?」

「かまわねえよ…
一緒に汚れちまおう…」

お兄ちゃんが
そう言ってくれたので
僕は安心して
眠る事ができました…



それから僕は
オネシヨをする事が
無くなりました

ウソみたいに
ピタッとおさまりました

あ...
あ...

いいんだぜ
今日は
我慢しなくても

お母さん
帰ってくるの
遅くなるって
言ってたから
大声出したって
かまわないぜ

でも その後
僕も お兄ちゃんも

オシッコ以外のモノで
布団を汚しちゃうように
なるんだけど...ねw



ちよつと恥ずかしいし
オネシヨした時よりも
もつと変な気分になるけど

でも もつそんなの
どうでもいいや...

お兄ちゃんと
一緒だったら僕は...

僕は...

お兄
ちゃん!!

お兄
ちゃん!!

お兄ちゃん
ああん!!



GOHAN 空想実験室



GOHAN/cik04770@rio.odn.ne.jp

発行/空想実験室(妄想研究所) 初出/2016年6月25日

※一部同人誌をGAY SHOP「BIG GYM」にて販売中です。

※ネットによるダウンロードサービスも展開中。詳しくは同人ダウンロード専用HP「DiGiket」まで